

令和8年度

一般選抜（前期日程）個別学力検査 小論文

解答例

問1

筆者は、大学はそれぞれの領域の知識を得ることを目的として学ぶ場所であり、「言葉」は学問的に物事を捉えるための手段として会得し、使用し、時に作り出す物と述べている。

私はこれまで、人からのサポートを受けたり、社会制度のお世話になることが多かったが、将来は自分が人の役にたつ、社会に貢献できる社会人になりたいと考えている。このため、筑波技術大学にて、障害者のための制度や合理的配慮、社会で活躍する視覚障害者や大学の先輩方の体験など、障害者が社会で活躍するために必要な学問的な言葉を学び、就職活動や将来像のイメージづくりに活かしたいと考えている。(269字)

問2

「一般的な障害の扱い方からすると、正反対のやり方」とは、障害があっても健常者と同じように行えることに価値があるとするのではなく、障害があることで健常者との間に生じる差異そのものを価値として捉える考え方である。

一般的な価値観においては、健常者に近づくことが障害の克服であり望ましいとされがちである。しかし、筆者が主張するように、障害があるからこそ生じる行動や経験があり、それらには固有の価値があるはずである。例えば、晴眼者にとっては造作のない外出であっても、視覚障害の場合は移動や環境把握の方法が異なり、それは別の経験として独自の価値をもつものである。(275文字)

問3

AIが人間の代わりに判断を行う社会では、効率性が高まる一方で、誤りが生じた場合の責任の所在が曖昧になる危険がある。文章の事例では、システムは設計通りに作動したが、その結果、無実の人物が晒された。問題は、誤認そのものよりも、誰がどのように検証し訂正するかという仕組みである。視覚障害者の生活でも、OCRやスクリーンリーダーなど、機械の判断に依存する場面は多い。しかし誤作動の際に人に頼れる体制があるからこそ安心できる。AIが自律的に判断する社会では、常に人間が最終責任を持ち、判断過程を説明できる制度と、当事者が異議を申し立てられる仕組みを整えることが不可欠である。(282文字)